

その他

看護学における病態生理モデルと看護実践への適用モデル構築のための一考察

Construction of pathophysiology model in nursing and application model to nursing practice

小田嶋 裕 輝¹⁾

キーワード：看護学, 病態生理学, 看護実践

Key words : Nursing science, Pathophysiology, Nursing practice

要 旨

病態生理に関して、医学は歴史的に膨大な知識を積み上げてきた。従来、看護学では、援助の対象の健康障害の種類や健康の段階をアセスメントするために必要な病態生理に関する医学知識を看護に活用できるように変換して取り入れてきた。医学は患者の診断と治療のために必要な病態生理を追求するが、看護学では、援助の対象の生命力の消耗を最小にするよう生活を整えるために病態生理の医学知識を活用する。しかし、医学の知識を看護学に結びつける思考過程は、必ずしも明らかでなかった。そこで、医学の知識を看護学に活用するためのモデルを考案したため、その内容を紹介した。

看護学における病態生理モデルとは、従来、医学が積み上げてきた病態生理に関する知識を看護学に必要な観点から再構築するためのモデルである。このモデルは、医学者の瀬江ら（2009）により提示された医学体系の全体像を基に構築したものである。同書によれば、「正常な生理構造（A）が、外界との相互浸透で（B）へと歪み、その歪んだ生理構造である（B）を、外界と相互浸透させることによって、（A）へ可能な限り近づけた（A'）へと回復させる」（瀬江ら、2009、pp.215-126）ことを示し、Aを理論的に説いたものを「常態論」、AがBへと至り、さらにBからA'へと回復する全過程を理論的に説いたものを「病態論」、BからA'への過程を理論的に説いたものを「治療論」と述べている。つまり、ここでいう「病態論」は病態への移行過程と病態からの回復過程の両方を統一的に捉えた理論として位置づけられる。また、瀬江（2016；2018）は、病気の歪みの過程の構造は、生理構造の機能レベルの歪

みから実体レベルの歪みに発展すると述べ、具体的には、①機能として歪みかけている生理構造、②機能として歪んでしまった生理構造、③実体として歪みかけている生理構造、④実体として歪んでしまった生理構造があると述べている。ここで、「機能として歪みかけている生理構造」とは、内部環境の変化に対応する器官の機能の維持が難しくなった段階であり、「実体として歪みかけている生理構造」とは、内部環境の変化に対応する器官の機能が破綻し、器官そのものを維持することが難しくなってきた段階であるといえる。そこで、看護学における病態生理モデルも、この4分類を参考にしてその構造を打ち立てた。なぜならば、「看護実践は自らのうちに『患者の病気の診断と治療』という医療実践の過程と成果を受け取ることによって」（瀬江、2001、p.170）、専門職としての実践を発展していくことができるからであり、医学の病気の捉え方の成果を看護に活かせる範囲で整理し直せば、看護学における病態生理

受理日：2021年1月14日 採択日：2021年1月18日

¹⁾名古屋市立大学大学院看護学研究科

モデルとして位置づけることが可能になると考えたからである。

そこで、看護学における病態生理モデルの構築は、この瀬江ら（2009）が構築した医学体系の全体像に基づき行った。具体的には、看護学における病態生理モデルとして瀬江の医学体系の全体像を捉え返し、病態生理（ $A \rightarrow B$ ）と回復生理（ $B \rightarrow A'$ ）の過程を看護学に必要な範囲で構築し直した。その結果、看護学における病態生理モデルは健康な人のどこにどのような変化が生じたかの一般的な流れ（ $A \rightarrow B$ ）と、病的な状態からの一般的な回復過程のどのような段階にあるか（ $B \rightarrow A'$ ）を統一的に論じるものと定めた。なお、 A の「正常な状態」の内容は、解剖生理学の内容であるところの、正常が保たれる生理構造（正常生理）とした。これらの関係を図1に示した。

次に、看護学における病態生理モデルを用いて患者の病気を看護学的に捉え返し看護実践に結びつけていく思考過程の構造を考えた。参考にしたのは医学における治療の考え方である。瀬江（2018）は、医学体系の構造論としての治療論には、大きく一般的治療論と特殊の治療論があり、特殊の治療論の構造として、病気の歪みの過程の構造に対応させる形で、①機能として歪みかけている生理構造を回復させるための理論（ $\text{㉞}-①$ ）、②機能として歪んでしまった生理構造を回復させる理論（ $\text{㉞}-②$ ）、③実体として歪みかけている生理構造を回復させる理論（ $\text{㉞}-①$ ）、④実体として歪んでしまった生理構造を

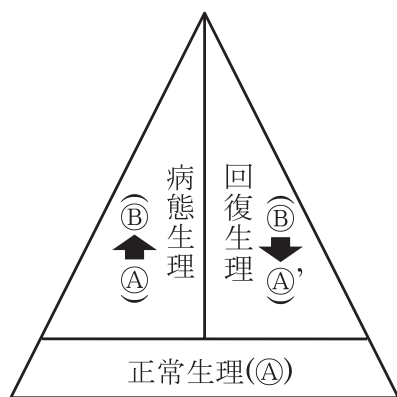


図1. 看護学における病態生理モデル

回復させるための理論（ $\text{㉞}-②$ ）があると述べている。このように医学においては病態論やそれを踏まえた治療論の重層的な構造が明らかにされている。そこで、医学の治療論の構造に対応して、看護学における病態生理モデルの構造と看護実践への適用モデルを示したのが図2である。

図2の中心にある四角の中で表現したものは、看護学における病態生理モデルの生理構造の段階性を示している。それぞれの生理構造の段階性に応じて、正常な生理構造に近づけるための生活上の規制（病生活上の規制）は強くなる。この病生活上の規制が強くなっていく様子を三角形で表現した。これは同時にそれぞれの段階に応じた看護として行える選択肢の幅も示している。一般的病生活は健康を保つための生活を指し、一般的看護が対応している。特殊的病生活は、一般的病生活に重ねて生理構造の歪みの程度に応じて規制の強くなった生活を指す。特殊的看護は一般的看護に重ねて、その特殊な規制を伴う病生活を、対象の生命力の消耗が最小となるように整える過程を指す。以上が看護学における病態生理モデルを看護実践に適用するためのモデルの説明である。今後は、看護学における病態生理学モデルに基づき、医学が明らかにしてきた多様な疾患についての知見を再構成し、看護技術への適用との関連で本モデルの有用性を検証していきたいと考えている。

文 献

瀬江千史. (2001). 看護学と医学 下巻 医学原論

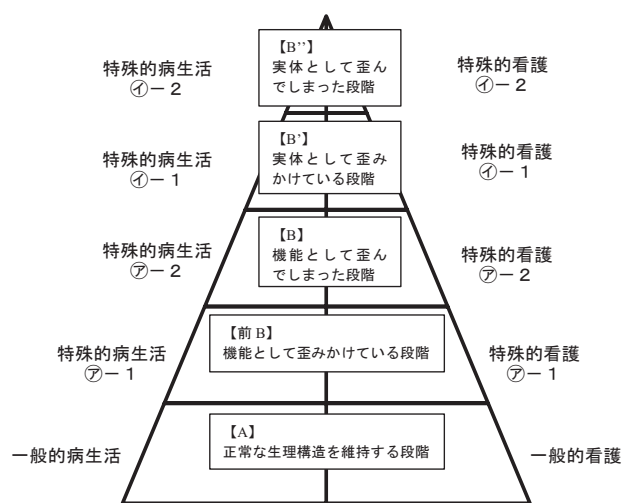


図2. 看護学における病態生理モデルの構造と看護実践への適用モデル

入門 (p.170), 東京;現代社.

瀬江千史, 本田克也, 小田康友. (2009). 医学教育
概論 (3) (pp.202-218), 東京;現代社.

瀬江千史. (2016). 「医学原論」講義 (十二) 時代
が求める医学の復権. 学城, 14, 96-110.

瀬江千史. (2018). 「医学原論」講義 (十三) 時代
が求める医学の復権. 学城, 16, 92-109.